

「ユダはどこに？」

ヨハネによる福音書 十三章二十一〜二十節

「ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった」。今月の聖書は三十節でそう語って、一連の箇所を閉じています。一つ前の口語訳聖書は言葉を足して「時は夜であった」と、そのようにいまいし丁寧に記しています。時は「夜」。「夜」と言われて、皆様はどんな印象をお持ちになられるでしょうか。どんなイメージを抱かれるでしょうか。ヨハネの抱く夜のイメージには、容易には見過ごしにできない、深く象徴的な意味合いが付きまっています。込められています。そこには、言いようのない、どこか妖しげで神秘的な雰囲気があります。つかみどころのない、どこか得体の知れない正体不明の雰囲気か漂っています。覚えておられるでしょうか。ユダや教の指導者のあのニコデモがイエス・キリストを密かに訪ねてやってきたのも、やはり夜でした（ヨハネ三・一〜二十一）。そして、夜にはまた、「闇の世界」という暗くて重苦しい印象が拭いがたく伴っています。それは偽りと企みの時であり、裏切りと罪の時です。本物の光を拒んで遠ざける時であり、自分自身が偽物の光になろうとする時でもあります。主イエスはそのようにして夜、十字架へと引き渡され、御自身の日の光の時「昼の時」に幕が下ろされたのでした。こうして今、イエス・キリストのその身が夜の闇に包まれようとしています。

実際、イエス・キリストの生きられた福音書の時代はそのような夜の闇に深く覆われた、嘆きや悲しみの声がかさこから聞こえてくる時代でした。弱い者は顧みられず、貧しい者は捨て置かれて、救いの必要なところにその手が差し伸べられない。力ある者が力あるところ得意よいよその力を振るっていました。例えば、今日のこの私たちの時代と似通っているのかもしれないかもしれません。私たちのこの時代もまた、同じように、闇に包まれているような思いにさせられないでしょうか。痛々しくも悲惨な現実が世界を覆っています。自然の災害にみまわれる人々がいるかと思えば、人間の災害や人間の差別に襲われて苦しむ人たちもいる。人と人が傷つけ合い、その命をさえ奪い合う。人が人を信じられず、「愛」とか「信頼」とかいう言葉がお伽噺の世界のものになってしまった時代。そのようにして、人と人の心が結び付くことを忘れていく時代。そのようにして、私たちの心が神様の心と繋がることを忘れていく時代です。その闇は決して浅くないように思われます。今日、世界はどのような闇の中にあり、私たちの国もまたそのような闇の中にあるように感じられます。そして実は、何よりもこの私たち自身がある中に思われるのです。さらには、そのよう

ななか、光を証しするために立てられている教会。その教会はそのような中であつて、はたしてどのような姿で立つているのか。自分自身もまたその闇に飲み込まれないように警戒しつつ、闇の中に光を灯そうと闘っているだろうか。外なる闇に対して、そして内なる闇に対して・・・と、そう考えさせられます。

そのような暗さからでしょうか。重苦しさからでしょうか。教派によつては、今月の「ユダの裏切り」の箇所からは説教をしないところもあるようです。「教会暦」といつて、すべての日曜日が、例えば「クリスマス」とか「イースター」とか、あるいは「聖霊降臨日」とか「宗教改革記念日」とかいうふうな「今日はこういう日だ」と定められている教派があります。そうしたところでは毎週の説教の箇所も決められているのが普通ですが、今月の箇所がそこから外されているところがあるといひます。「裏切り」について語るといふことは、語る者にとつてたしかに重荷ですし、きつくてつらいことです。何よりかにより、難しく、暗くて重いわけです。ですが、「ヨハネの福音書」をまとめた信仰者は、うれしくもなければ喜ばしくもない、むしろ卑しく見たくもないそんな裏切りの出来事を削つたりごまかしたりすることなく、そのままに書き留めています。しかも、「イエス・キリストはなぜ、自分を裏切るような人物を十二弟子の一人として選んだのか」「ユダはどうして、自分の主を裏切ったのか」「ユダが裏切ることに気づいておられながら、主イエスは何もされなかったのか」などと、分かりにくいことだらけです。実際、「ユダの存在は最も深い謎であり、そこは底知れぬ闇に包まれているかのようだ」と、そのように述べている神学者もいます。ユダの裏切りというのはいつたい、どういうことなのでしょう。それは私たちに何を語りかけてくるのか。神様のどんな御旨みむねがそこに置かれているのか。今月は、私たち自身もその中に置かれているそうした夜の闇の中から光の主イエス・キリストに目を注ぎながら、聖書のメッセージに御一緒に聴いていきたいと願っています。裏切りのユダはいつたい、どこにいたのでしょうか。そして、はたしてどこに行つたのでしょうか。

まずは、イエス・キリストと弟子たちとのやり取りは「どんな場面か」「どんなふうにして」なされたのでしょうか。「いつ」の時のことかといえは、それは十字架につけられる前の晩のこと。いわゆる「最後の晩餐」と呼ばれる、あの有名な晩餐の席でのことでした。すぐ前の一節から二十節を見ますと、主イエスが弟子たちの足を洗われた「洗足」と呼ばれる出来事の様子が記されています。今月の箇所はつまり、それに続いて、その直後に同じ席で起こったことが分かります。

「どんな場面か」といふのはそのように「最後の晩餐」の席でということに難しくないので、

ところが、あと一つの「どんなふうにしてか」というのが少々厄介やっかいになります。というのも、最後の晩餐というと、私たちはすぐにもレオナルド・ダ・ビンチのあの有名な絵を想起おぼえすからです。想起おぼえこしてしまつて、それに引きずられてしまつて、そしてそこに描かれている様子からすべてを想像してしまいがちだからです。御覧になったことがおありでしょうか。横長の画面に、これまた横長のテーブルが据えられています。その向こう側にイエス・キリストを中心にして左右に六人ずつ、合計十二人の弟子たちが配置されている。主イエスも弟子たちもどうやら一人ずつ、それぞれがいわゆる椅子に腰かけているようで、そのようにして比較的整然と横一列の形で描かれています。そして、そんな彼らの前のテーブルに、食器と食べ物、飲み物が置かれているといったぐあいです。これがダ・ビンチの思い描いた最後の晩餐の情景ですが、「基本の学び」で改めて御一緒に眺めたとおりです。ただ、これが実際のところどうだったかといいますと、実際の席はどうもこれとは少し違つていたようです。しかも、そのちよつとした違いが今月のメッセージを聴き取るうえで重要なかぎかぎになる。どういうことかといいますと、つまり、そのような幾つかの違いを知ることことで今月の聖書の語りかけがより良く響いてくるように思われるのです。当時のことはたしかに今となつてはなかなか分かりにくくて、実際の様子を百パーセント正確に理解するのは難しいようです。けれども、それでもそこそこそれなりに再現することは可能ですし、そこから幾つか大事なことを示されるように思います。

ということでは「最後の晩餐」の席の様子は実際にはどうだったのでしょうか。想像の域を出ない部分もありますが、これまでの研究を参考にして、また私たちのイメージションをフルに働かせて、そのあり様さまを御一緒に思い描いてみたいと思います。探偵もどきの作業になりますが、それもまたおもしろいのではないのでしょうか。ちなみに、「基本の学び」のときに眺めた三枚の「最後の晩餐」の絵ですが、どれもがなかなか魅力的な名画でした。ただし、部屋の大きさ、座席の配置、弟子たちの座り方など幾つかの点から、二番目の「ヤコポ・バッサーノ」の絵がイメージとしてはどうやら、実際の様子に一番近いのではないかと考えられます。一番目の「レオナルド・ダ・ヴィンチ」を応援された方や三番目の「ニコラ・プッサン」を応援された方には申し訳ありませんが、そういうわけで、バッサーノの絵を参考にしてこの先のお話を進めさせていただきたいと思ひます。皆様はバッサーノの絵をもう一度想起おぼえしてください。そしてこの先の探偵作業に加わっていただけたらと思ひます。

事は、紀元一世紀のパレスチナ地方のこと。しかも、大勢おおぜいで食事をしたときのことです。まず第一に、人々はそのとき、現代の私たちとは違つて、一人ひとりが自分の椅子に座つてテーブルを囲

んだのではないようです。そうではなくて、低めのテーブルがまず中央にあります。そして、その周りを、「コの字形」になって皆が囲みます。すなわち、テーブルの一方を開けるようにして囲むわけです。コの字の頭の部分の中央に座るのは、その席の中心人物。ここでは言うまでもなく、イエス・キリストです。その他の人たちはその左右に分かれて、コの字に沿って座ることになります。そのようにしてテーブルを囲むのが一般的だったようですが、しかしおもしろいというか、私たちの生活スタイルとだいぶ違っているのはその座り方と食事をするその姿勢です。どうということかというところにはたしかに椅子状のものがテーブルの周囲に置かれていて、人々は床に直接座ったわけではないようです。ただし、それはどんな感じのものかといえば、低めのテーブルよりまた一段低いソファのようなもので、しかも長いものです。それが三つ、それぞれテーブルのコの字の各辺に沿って置かれてあります。そこにみんなが座って、食事のテーブルを囲んだというわけです。ところが、本当の問題はここからです。どんな姿勢でその長いソファに座ったのか。つまり、どんな格好をしてそのソファに座り、どんな格好をしてテーブルの上のものを取って食べたのかということ。実は、このあたりから、私たちの習慣とはだいぶ違ったものになってきます。まずは、ソファに腰を下ろします。次に、普通は左の肘をテーブルについて、それを支えにするようなかたちで体を少し斜めに傾げます。そして、両足をソファから投げ出すような姿勢をとるわけです。そのような格好で、空いている右の手を伸ばしてテーブルの上のものを取って食べるというのがどうやら一般的な会食の席の様子だったようです。ですので、全体としては、コの形の低いテーブルを囲んで三つの長いソファに何人もの人たちが次々と体を傾げ、そして隣り合わせに順々に座る。これがどうも、大勢の者たちで食事をするときの様子だったようです。弟子たちはそのようにして最後の晩餐の席に連なり、真ん中に座られた主イエスの一挙手一投足に右から左から目を凝らしたのでした。

イエス・キリストが口を開かれたのは、そのときでした。弟子たちを、思いがけない展開が襲いました。「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている」。二十一節にあるように、主イエスが突然、そう言い出されたからです。これを聞いた弟子たちは当然ながら、驚きます。「弟子たちは・・・顔を見合わせた」と、続く二十二節に記されています。突然の言葉に意表を突かれた弟子たちは目を白黒させたことでしょう。そこでまたまた、リーダー格のペトロの登場となります。しかし、ペトロはどうやら、中央のイエス・キリストからは少し離れたところにいたようです。ですので、二十四節はこう語っています。「シモン・ペトロはこの弟子に、「主イエスは」だれについて言っておられるのかと尋ねるように合図した」。「この弟子」というのは、すぐ前の二十三節に書かれています。「イエスのすぐ隣には、弟子たちの一人で、イエスの愛しておられた者

が食事の席に着いていた」。この「弟子たちの一人で、イエスの愛しておられた者」が、それです。実は、この「イエスの愛しておられた者」という呼び名はヨハネ福音書に何回か出てくるもので、諸説がありますが、ここでのそれはおそらく十二弟子の一人のヨハネであろうと考えられています。私たちの前にある「ヨハネによる福音書」（へんきん）編纂の最初にいる人物です。その「イエスの愛しておられた者・ヨハネ」は、自分で自分のことをそう言うほどに、それほどまでに主イエスに親しく接し、思いを寄せ、愛着を感じ、憧れを抱き、信頼をしていたのでしょうか。「主よ、それはだれのことですか」と、ペトロに促されるままに二十五節でそう尋ねますが、どんな格好をしてそうしたかという、そのすぐ前です。「イエスの胸もとに寄りかかったまま」そうしたというのです。胸もとに寄りかかったままです。こんなところからも、その愛着の深さが感じ取れるのではないのでしょうか。位置関係から言うと、向かってイエス・キリストの左側。そこに座っていて、主イエスの膝（ひざ）に身をのせるようにして体をあずけ、そして左肘をテーブルについている。そんな格好です。ちなみに、ヨハネに尋ねさせたペトロはというと、そのヨハネのすぐ左隣に描かれている場合が多いようです。ダ・ヴィンチもバツサーノもそのように描いています。ですが、すぐ隣に座っているのなら、「耳打ちする」というのが普通ではないでしょうか。なのに、ここでは「合図した」というのです。原語のギリシア語では、「ジェスチャーでもってシグナルを送る」という意味合いの言葉が使われています（neuei neuoer）。（neuei neuoer）英語聖書の最近のものを見ても、“signalled”と訳出しています（REB）。「シグナルを出す」、つまり「サインを送る」ということです。要するに、ヨハネからも離れて座っていたペトロは、あごをしゃくって促すようなしぐさをしたのでしょうか。何らかのサインを送って、ヨハネに尋ねさせたのでした。

そのようにして、胸元で尋ねるそのヨハネの問いかけに対して、イエス・キリストは次のように答えられます。二十六節「わたしがパン切れを浸（ひた）して与えるのがその人だ」。しかしながら、ここでいったい何が起きているのか、事の経緯（ことわり）を理解する者は誰もいなかった。おそらくは、ヨハネを除いて誰もいなかった。そして、「ユダはパン切れを受け取ると、「主イエスを引き渡しに」すぐ出て行った。「時は」夜であった」と、三十節はそう記すのです。これが「ユダの裏切り」のあらましです。夜の闇の出来事です。私たちはこの月、こうした暗くて重苦しい出来事からいったい、何を聴き取ることを期待されているのでしょうか。はたして、何を示されるのでしょうか。

「イエスはこう話し終えると、心を騒がせ、断言（たつげん）された」。今月の聖書は二十一節でそう切り出しています。しかも、続けて「はっきり言っておく」と、いま一度念を押すようにして、イエ

ス・キリストはそうも言っておられます。すなわち、「これから言うことはどうでもいいようなことではない。重[・]いことだ。この私[・]がその命をかけて語ることだ」と、そう言われるのです。そして、そのようにして口にされたのがまさに「あなたがたの一人がこの私を裏切ろうとしている」という、そのことでした。

とはいっても、それを聞いた弟子たちが「だれについて言っておられるのか察しかねて」(二十二)とか、あるいはまた「座に着いていた者はだれも、なぜユダにこう言われたのか分からなかった」(二十八)とかいうのはやはり、いったいどういうことなのでしょう。誰も、誰一人、ユダに疑いらしいものを抱いていないようにみえるからです。ユダが主イエスを裏切ろうなどとは、誰も思っていないようにみえます。不思議といえば、なんとも不思議なことではないでしょうか。それに、そもそも、です。そもそも、もしもそこにいる全員に対して「パン切れを与える人がこの自分を裏切る」と言ったとしたなら、またそのように教えてから「ユダに『パン切れを』お与えになった」(二十六)としたなら、その一部始終を聞いて見ていた弟子たちが「なぜユダに『しようとしてることをしなさい』と言われたのか、皆目見当がつかなかった」などという、どうしてそんなことになるのでしょうか。人によっては、「弟子たちみんなに次々とパン切れを渡されたから、だから、どうして特別にユダなのか気づかなかったのでは？」と、そのように言う人たちもいます。たしかに、当時のユダヤでは、一家の主人がテーブルでもそのマスターとして、食卓の食べ物を皆に分かち与えたようです。私たち日本の習慣とは違って、当時のユダヤではそんなふうだった。そして、イエス・キリストはそのようにして、テーブルの主人として、みんなにパンを分かたれたのだろうというわけです。けれども、それならばそもそも「私がパン切れを与えるのがその者だ」などと言うことにはないわけで、これもまた、いま一つしっくりきません。

そこで考えられるのは、想像力を働かせてその場の様子を再現するなら、こんなぐあいではなかったかということ。ペトロの合図を受けて、すなわち目立たないように指示するそのサインを受けて、イエスの愛しておられた弟子・ヨハネがイエス・キリストに尋ねます。主イエスの胸元に寄りかかったままの格好で、その耳元に口を寄せるようにして、そのようにしてほかの弟子には聞こえないような仕方[・]で尋ねたのではないのでしょうか。そして、イエス・キリストの返答を、これまた自分の耳元に返されたその返答を、ヨハネは聞いたのではないのでしょうか。ですから、それは他の弟子たちには聞こえない返答でした。「私がパン切れを与えるその者が、今から与えるその者がその人だ」。だとしたなら、誰が裏切るのか、ヨハネは分かっていたのではないか。ヨハネだけが分かっていたのではないのでしょうか。そんなふうに思わされています。

そして、もしそうであるならばなおのこと、ユダは弟子たちの輪の中でほとんど「悪者」とは思われていなかったということになりはしないでしょうか。誰もユダに疑いを持ってはいなかった。ユダは悪役とは見られていなかった。もつと正確に、もつと本質的な言い方をするなら、「自分たちとどこも変わらない、同じような人間」と思われていたということです。そんなふうに思わされてなりません。そのことに気づかされて、私は、裏切りのユダに対する印象がこれまでとは微妙に違ったものとなりました。みんなと変わらなかった。同じだった。ひよつとすると、同じどころじゃない。二十九節にはこう記されています。「ある者は、ユダが金入れを預かっていたので、『祭りに必要なものを買いなさい』とか、貧しい人に何か施すようにと、イエスが言われたのだと思っていました。つまり、ユダは、イエス・キリストのもとに集まった弟子たちの「会計係」を任されていたのでした。お金を任される人というのは、どんな組織でもまず間違いなく、信頼のある人ではないでしょうか。しかも、そのお金の蓄え方や使い方について賢明な人であり、必要な能力や判断力を持つた人です。ユダはおそらくは、そういう人だったのではないのでしょうか。そして、そのユダを直接の責任者として、イエス・キリストの一行は、祭りのときには献げ物ささげものなどに必要なものを買っていたり、あるいは祭りに付きものの貧しい人たちへの施しを行なったりしていたのでした。時はまさに、「過ぎ越しの祭り」を翌日に控えたその晩でもありました。要するに、ユダは取り立てて悪い人ではなかったということです。なかったどころか、むしろ「神殿での信仰」や「施しの愛」に励んだ模範的な人でさえあったのかもしれない。そんな、ある意味で立派なユダがイエス・キリストを裏切る者になっていくということです。この私たちのこととして、それはいったいどういうことなのか。そんな立派な人間のいったい何が主イエスを裏切らせるものになっていくのか。私はそんなふうにご考えさせられてなりません。

このことを考えるうえで一つの大きなヒントになるのは、「裏切る」というその言葉自体のそもそもの意味合いではないかと思われれます。ここでは、そこに注目することが謎解きのかぎになるように思われます。つまり、ここで「裏切る」と訳されている言葉は、元のギリシア語ではそもそも「渡す」「手渡す」「引き渡す」とかいう、ただそれだけの意味を持つ言葉にすぎないということですバラドローセイ バラディドミ (παράδοσει > παράδομι)。日常のこととしては、書類を手渡すとか役割を引き渡すとかいうように用いられる。そして、それが場面が変わると、「人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは〔人の子に〕死刑を宣告して〔これを〕異邦人に引き渡す」などというふうになるわけです。マルコによる福音書の十章三十三節の言葉です。ですので、今月の冒頭の二十一節の言葉もそのままに直訳すると、「あなたがたのうちの一人がわたしを引き渡すであらう」と

いうようになります。つまり、十二弟子の一人のユダが、立派な弟子のユダがイエス・キリストを引き渡そうとしているのです。誰にでしょうか。これまた、いわゆる立派な祭司長や律法学者たちに、です。そして最後は異邦人に、異邦人の総督ピラトに、すなわち不信仰の者へと引き渡されていくことになります。よくよく考えてみると、なんとも怖い話ではないでしょうか。現代の私たちの場面設定で言い換えるならば、立派な弟子が、すなわち立派な信者が立派な宗教指導者にイエス・キリストを引き渡し、それがついには不信仰という結末に立ち至るというのですから、そうそう穏やかではられません。信仰の立派さを求める信仰者にとって、何とも言いようのない怖れを憶えさせられる成り行きです。

だとしたなら、その「罨^{わな}」とはいったい、どこにあるのでしょうか。落とし穴ははたして、どこにあるのか。イスカリオテのユダはいつたい、どこでその罨にはまってしまったのでしょうか。信仰ということ^{まじめ}を真面目に受け止め、信じるということ^{まじめ}を誠実に考える人にとっては、それはとても大切なことであるように思われます。そして、それはほかでもない、ユダが主イエスを祭司長たちに引き渡したその理由に、すなわちその動機に深く関係しているように思われます。ユダはなぜ、命を狙うむ者たちにイエス・キリストを引き渡したのでしょうか。その動機についてはいろんな人たちが様々な考えを述べていますが、ここではその代表的なものを一つだけ御紹介するにとどめたいと思います。しかし、そこから響いてくる問いかけは決して小さなものではないように思われます。ユダの出来事を通してこの私たちに語りかけてくる、そのメッセージです。

ユダはどうして、イエス・キリストをいわゆる敵方^{てきがた}に引き渡したのでしょうか。一つの代表的な見解として、次のようなことが言われています。すなわち、ユダは彼なりの理想に燃えていたのです。旧約聖書の信仰に立って、神を敬い、貧しい者たちに施しもしていた。そのようにして、いつの日かユダヤをローマから解放し、自由と繁栄の祖国をいま一度再興させたいと願っていた。「そのため、自分は力あるイエスの一群に加わり、身を献^{ひた}げて、その理想の実現に献身したい」。ユダはそう思っていたのではないかと言います。けれども、もしもそうだとしたら、ユダはそんなですから、熱くなればなるほどかえって逆にイライラが膨らみ、焦りが増していったのではないのでしょうか。なぜならば、主イエスが自分の思うように動いてくれないからです。自分の理想とするように振舞ってくれないからです。「神の前に礼拝^{らいげん}を敬虔^{けいけん}に献^{ひた}げる。虐^{しいた}げられた貧しい者たちに愛の施しをなす。それらはもちろん、欠かすことのできないことであって、この自分も率先してそうしたことに励んでいる。だけど、それらはすべて、このユダヤに神の支配をもたらすためではないのか。ここに今、神の国を具体的に実現するためではないのか」。ユダ

はそのように考え、そして、そのために力をもって立ち上がってくれない主イエスに不安とイライラを膨らませていったのではないかというのです。イエス・キリストが民衆に働きかけて、祖国解放の運動に立ち上がらせようとしなからずです。気をもんで焦りをつのらせたユダは、だからこそ、主イエスを当局に引き渡してのつぴぎならないところに追いつめ、いよいよ運動に立ち上がらせようとした。「そこまで追い詰めれば、いかに人のいい先生でも、窮地を打開するために立ち上がらざるをえないだろう」と、そう考えて・・・これが、裏切りのユダの謎をめぐる代表的な解き明かしの一つです。

たしかに、ユダはそう考えて、イエス・キリストを引き渡したのかもしれませんが、仮にそうだとすると、そうであればなおのこと、こう思われるのはこの私だけででしょうか。ユダを理想に走らせたのはいったい何だったのだろうか。「神のために」とフレーズを繰り返していたにちがいないユダ。自分はそのためにこそ身を献げていると、ユダは自分でもきつとそう信じて疑わなかっただろうと思います。ですが、本当のところ、そこにあつたのは何だったのでしょうか。ひよつとすると、当の本人自身も気づいていなかったのかもしれない、そんな心の奥底にあつた本当の動機です。それは、「神のために」と言いつつも、ユダは実は、心の奥では自分自身の願いと望みを追い求めているのかもしれないということです。ユダがイエス・キリストの弟子になったとき、そのときの志には良いものがあつたにちがいません。それどころか、もしかすると、誰よりも良いものだったかもしれません。しかし、しだいに主イエスとの距離が開いていきます。ユダの目から見ると、主イエスが自分の思いを満たしてくれないからです。期待が大きければ大きいほど、失望も大きくなり、幻滅が膨らんでいったことでしょう。たとえ「神のために」と信じていても、それが自分の思い込みにしかならず、イエス・キリストの御心みこころと違ったものになつていったとしたら・・・。そのようにして、イエス・キリストの思いではなく、知らず知らずのうちに自分の思いを願い求めるようになっていったとしたら・・・。そのギャップはきつと、ユダをとんでもないところに引きずり込んでいったのではないのでしょうか。ユダはそのときこう思っていたと、私の知る神学校の教授が繰り返して語っていました。「この自分のほうが先生より、神の御心をよく知っている。この自分のほうがよく分かっている」。ユダはもしかすると、自分の思いを実現させるために神の名を口にしていただけかもしれませんが。自分の夢や願いの実現のためにです。信仰においても、ボタンを一つかけ違えると、取り返しのつかない事態に陥るということは珍しくないのではないのでしょうか。ユダはこうして、イエス・キリストを裏切ったのでした。

とはいうものの、たとえそんなだからといって、この私たちははたして、そんなユダを責めること

ができるでしょうか。ユダの犯した罪の深刻さを指摘することはできても、でも、そのユダを裁く資格がこの私たちにあるでしょうか。私たちははたして、ユダよりましな人間なのだろうか。この私ははたして、ユダよりもましな人間なのだろうか、そう思われるからです。事実、イエス・キリストが今月の箇所に先立って弟子たちの足を洗われたとき、ユダだけでなく、全員の足を洗われたのでした。全員が誰一人の例外もなく洗っていたかねばならないような、そのような存在だからです。しかも、いわゆる一番弟子のペトロからして、ついには「そんなイエスなんか知るもんか」と、三度も主イエスを棄て去ってしまいます。そして最後は、弟子たちの全員が十字架上の主イエスを見捨てて逃げ去ってしまう。いざとなると、誰もがみんな、イエス・キリストを手放してしまいます。その意味で、誰もがユダにならないとはかぎらない。誰もがユダと変わらないように思われるのですが、いかがでしょうか。

ですから、私は自分自身に問いかけます。問いかけざるをえません。こんなふう입니다。ユダはユダなりに、その信仰において懸命に力を尽くそうとした。施しの奉仕についても、熱い思いをもって、愛の正義漢として誰よりも懸命にそうしたのかもしれない。律法学者たちにしても祭司長たちにしても、彼らだつてみんな、律法を知っており、礼拝を尊んで、愛の戒めを大切にしていたはずですよ。言ってみれば、みんな、彼らなりの仕方でも神様を愛していたのでしょう。単に「悪者」と片づけることはできないように思います。この私とどこが違うのでしょうか。なのに、そんな彼らの罪を聖書が指摘しているとするなら、それはいったいどういうことなのか。神を愛することを努めながら、そこでお罪を犯していつてしまうというのです。神様を愛していると思っっているその自分が、そのなかで罪を犯していつてしまうというのです。それはきっと、こういうことなのではないでしょうか。つまり、愛の「向き」がいつの間にか変わってしまうということです。愛の方向がいつの間にか変わってしまったって、その結果、愛の「中身」もその「質」も変わってしまうということではないでしょうか。

そもそも、愛というものに鈍くて、疎くて、薄い私たちです。本当ならば、愛というものにもつと敏感で、それにもつと心を震わせて、それをもつと尊ばねばならない私たちです。しかし、そんな私たちですから、その向きがいつの間にか変わってしまう。いつの間にか、「神様」に向いたそれから「自分自身」に向かったそれに変わってしまうように思います。神を愛すると言いながら、もつと言うなら自分では神を愛していると思いきえしているものの、でも実のところは、神様ではなくて自分自身の期待や夢や好みや願いの達成のために「神様、神様」と、信仰の言葉を口にすることです。自分自身の思いの実現のために、すなわち「自己実現」のために神様の名を唱え、信

仰のあれこれに励むということです。ユダはおそらく、そうだったのではないのでしょうか。祭司長たちや律法学者たちもまた、そうだったのではないか。彼らは実は、主イエスや神の御心を愛したのではなくて、自分自身の願いや期待や思惑を愛したのではないのでしょうか。そのようにして結局は、自分自身を愛したのではないか。ですから、ユダはついにはイエス・キリストを手放してしまった。手渡してしまったのではないのでしょうか。そして、です。そして、その同じユダがこの自分自身の中にも潜んでいるのを、私は見る思いがしています。潜んで、うずうずして出番を待っているのを見る思いがしています。この私の中にもいる「内なるユダ」の誘惑に気をつけなければと、そう思わされています。ユダのように自分の期待にしがみついて、主イエスをその期待に引き渡してしまうことのないよう、そのようにして主イエスを手放してしまうことのないよう、心していなければならぬと思わされています。ユダはどこに居るのか。「この私の中のここに居る」と、私はそう答えざるをえません。事は、ですから、自分の期待に引きずられるのではなく、愛するという耳を神様の方に向けて、神様にこそ聴いていくということではないのでしょうか。自分の好みや願いの実現のためではなく、神にこそ聴いていく。もつと具体的・もつと正確には、イエス・キリストにこそ聴いていく。聖書のキリストにこそ聴いていくということです。あくまでもどこまでいつても・いつも、そのことを忘れないでいたいと思わされています。

最後に、あと一つの問い「ユダはどこに行ったのか」ということです。こうしてイエス・キリストを裏切る者となったユダははたして、最後はどこに行ったのでしょうか。いわゆる「地獄」と呼ばれるような、そのようなところに落とされてしまったのでしょうか。イエス・キリストを裏切るというユダの行為それ自体は、どう見ても「良し」とされるようなものではありません。聖書も一貫して、悪しきこととしてそれを記しています。とはいうものの、ユダを見詰め続けられた主イエスの心情はいったいどんなものだったろうかと、そう思わされます。イエス・キリストはユダの足をも洗われたのでした。それどころか、そもそも主イエスがユダを選んで、ずっと一緒に歩いてこられたのです。しかも、聖書の記述によれば、早い時期から裏切りの予感を感じ取って、それと知りながら、です。最後の最後の夜まで見放さないで、御自分の傍らかたわに置いて、です。最後の晩餐の席からついに夜の闇の中へと出て行ったそのユダの後姿を、イエス・キリストはどんな思いで見詰められたのでしょうか。私は、思います。弟子たちの足を洗って話をされたのは、ユダのことをとりわけ心に留めてのことではなかったのか。ユダに事を思いとどまらせるその機会を与えようとされていることではなかったか、と。今月の二十七節で「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」と、ユダに

そのように声を強めて言われたのも、ユダにそのような最後の最後のチャンスをとる思いからではなかったかと、そう思われるのです。イエス・キリストはそのようにして、生涯ずっと、ユダに手を差し伸べ続けられたのではないのでしょうか。

おぐらよしあき
小倉義明という先生がおられます。東京にある女子聖学院で短期大学の宗教主任や中高の校長を務められた後、のち聖学院全体の院長をも歴任。現在は日本基督教団の使徒教会で牧師をなさっておりますが、その小倉先生が次のような言葉を記しておられました。「差し伸べられた手は交わりを癒やし、不和やわだかまりをも癒やす」。それは、御自身の経験から来ていました。どういふことかというとき、あるとき、先生の聖書研究会にかつて出席していた元短大生から手紙をもらったのだそうです。けれども、返事を返事をするつもりも、半年もそのままにしてしまっていたといふところが、です。ところが、そんなある日、その元短大生から電話がかかってくる。そして、その電話口でこう言ったのでした。「先生が交わりを大切に、それを意識して保つようと、最後にそうおっしゃられたので」。そのことを振り返って、小倉先生は先ほどの言葉を記されたのでした。「差し伸べられた手は交わりを癒やし、不和やわだかまりをも癒やす」。先生はおっしゃられます。「交わりの回復の糸口を彼女のほうからつくってくれた。私は詫言わげばならなかった。彼女のほうから、手を差し伸べてくれたのだから」

イエス・キリストはきつと、このような手をユダに差し伸べ続けられたのではないのでしょうか。報われないことも覚悟のうえで、ひたすらにそう続けられたのではないのでしょうか。そこには、主イエスの深い愛と闘いの姿があるように思われます。ユダもまた、その眼差しまなざしの中に置かれていたのだらうと思います。しかも、裏切りを働いたそんなユダであっても、結果的にはイエス・キリストの十字架への道をつくって、そうしたかたちで神の御業みわざを進める者とされた、そのように語る神学者もいます。いずれにせよ、裏切りのユダをも愛し抜かれたイエス・キリストの御姿が、そこにはあった。私はそこに、神様の憐れみを祈り求めたいと思わされています。望みを置きたい、そのように思わされています。ユダのしたことはもちろん、良しとはできません。けれども、「二人の人間」としてのユダの救いについて、ただただ恵みと憐れみとを祈り願うばかりです。なぜならば、この自分もまた、ユダの一人にほかならないからです。

ユダははたして、どこに行ったのか。その答えは残念ながら、私たちの手の中にはないように思います。「汝なんじ、裁くなかれ」。私たちに裁くことはできません。それはただ、神様の御手みてに委ねるほかないのではないのでしょうか。祈り願いつつそうするほかないのではないのでしょうか。

〔祈り〕

愛する神様。

私たちは今月、「裏切り」という重い問いかけをあなたの聖書から受けました。どうぞ、その意味するところを正しく理解し、あなたを間違った思いに引き渡すことのないよう、私たちの内なる目を繰り返しあなたに向けさせてください。

事あるごとにあなたから目を逸^そらせ、自分自身の関心や利害に目を濁らせてしまう私たちです。けれども、裏切りというおそろくは最も卑劣な悪事の中からさえ、あなたは私たちの救いを紡^{つむ}ぎ出し、立ち返る場所を用意してくださいました。その憐れみに心から感謝いたします。あなたが御^み子イエス・キリストにあつて用意してくださいましたそのところに私たちがいつも目を据えて生きられるよう、どうか、私たちの思いをあなたに真つすぐなものとしてください。

私たちはまた、祈ります。苦しみや闘いや差別や痛みの中にある人々の上に、あなたのその顧みがりわけ豊かに注がれますように。あなたの思いがすべての人々を包み込み、その心を良きものへと導いてくださいますように。そして、命あるすべてのものの中に深い癒やしと回復と平和とをもたらしてくださいますように。

恵みの主、イエス・キリストの御名によつて願い、お祈りいたします。

アーメン